

R. デ・ローヴァー『為替手形発達史

—14世紀から18世紀—』(4)

(*R. de Roover, L' Evolution de la Lettre de Change,
XIV^e—XVIII^e Siècles, 1953*)

楊 枝 嗣 朗 訳

序文 (フェルナン・ブローデル執筆)

謝辞

(以上, 略)

序章

第1節 本書の課題

第2節 先行研究の検討

第3節 為替手形の発展段階

第4節 為替契約と徴利をめぐるキリスト教の教義

第1章 14世紀の為替手形の起源

第1節 ジェノアその他における銀行と為替の始まり

第2節 ジェノアの公証人の公証記録に基づく初期の為替契約

第3節 為替手形の原型である「為替を原因とする契約証書

(*instrumentum ex causa cambii*)」

第4節 ジェノアとシャンパーニュ大市間の為替取引：貨幣市場の生成

第5節 シエナでの為替契約：同一地域内で結ばれた期限付き為替

第6節 「為替を原因とする契約証書」から為替手形へ

第7節 「為替を原因とする契約証書」と為替手形の純粹に形式上の
差異

(以上, 本誌第19巻1号, 1986年4月)

第2章 14, 15世紀の為替手形と貨幣市場の発展

- 第1節 為替手形；為替契約とその証明・実行手段
- 第2節 ダニニ文書に基づく為替取引の典型的な事例（1399年）
- 第3節 手形文言，為替の価格・相場，銀行所在都市の相場決定
- 第4節 為替相場と利子；スコラ学説
- 第5節 為替相場変動の他の要因；貨幣の通用価値変更と正貨現送点の役割
- 第6節 為替相場と国際収支
- 第7節 為替相場と為替投機
- 第8節 中世貨幣市場の一般的特徴

（以上，本誌第42巻2号，2009年7月）

第3章 16世紀貨幣市場の転換

- 第1節 貨幣市場の拡大と貿易の伸張
- 第2節 スコラ教義：その広がりと制約
- 第3節 中世的伝統の残存
- 第4節 大市は新しい為替手形を生み出したのか？ 振替と相殺による決済，エキュ・ドゥ・マルク，戻し為替付き為替（*cambio con la ricorsa*）
- 第5節 スペインの特殊事情

（以上，本誌第42巻4号，2009年11月）

第4章 手形裏書の生成

- 第1節 問題の状況
- 第2節 中世に於ける債権譲渡
- 第3節 ネーデルラント，特にアントワープでの裏書の先行事例
（以上，本号所収）
- 第4節 イタリアでの裏書の起源
（以下，次号）
- 第5節 スペインでの裏書の端緒
- 第6節 特別な事例：イングランド
- 第7節 フランス，ドイツでの裏書の普及
- 第8節 裏書の法的・経済的影響

第4章 手形裏書の生成

第1節 問題の状況

(p.83) 手形裏書の起源は、為替手形史が提起する様々な問いの中で、最も難解で最も論争されてきた問題のひとつである。その上、その問題領域はとりわけ捉えにくいだけに、その解明に取り組むのに躊躇させられるほどである。多くの場合、資料不足から断定的に論じることができないのである。言うまでもなく、我々が提示する見解もひとつの仮説にすぎず、新たな資料によって破棄されるか修正される範囲内で、価値があるだけである。

今日まで、歴史家は、為替手形の裏書が17世紀初頭以前には発展しなかったという点では一般的に合意してきた。⁽¹⁾ 事実、これまで1610年より以前の裏書の事例は、知られていなかった。⁽²⁾ ところが、ヴァリャドリドの古文書館でアンリ・ラペールや、フィレンチェ国立古文書館でフェデリーゴ・メリスによる発見により、これまでの見解は完全に覆されることになった。裏書は1600年より遥かに古く、恐らく、16世紀初めにまで遡るというのが、いまや、動かし難い事実となったのである。この時期以降、商人らは、為替手形の流通を促し、それを言葉の近代的な意味での譲渡性証券に作り変えることを求めてきたのであった。彼等がそのことに初手から成功したかどうかを知らねばならない。なぜなら、当時、立法者や法学者、さらにはある階層の商人ですら、裏書慣行には敵意を抱いていただけに、裏書はそれらをくつがえす革
(p.84) 新であった。18世紀になっても、手形裏書はあらゆる所で認められていたわけではなかった。⁽³⁾

議論に入る前に、商業手形の流通性が何を意味するのかを説明することが恐らく有用であろう。手形が流通性をもつためには、手形の裏面か下段に書かれた簡単な指図によって、手形の額面金額を取り立てる権利が譲渡されねばならない。裏面に書き込む慣行が最もよく使われるようになり、フランス語でこの種の譲渡を意味する裏書(endos), すなわち endossement の用語がテクニカル・タームになった。しかし、裏書は譲渡行為を意味するだけに止まらない。さらに、譲渡人ならびに裏書したすべての者に対する遡求の権利を、譲受人に与えなければならない。⁽⁴⁾ 第3の要件は、債務者が最初の債権者

や裏書人の一人ひとりに抗弁することが出来たとしても、支払を求めて最後に現われた善意の手形持参人には抗弁できないということである。換言すれば、商業手形の流通性というのは、取引の首尾よい終結の点で、署名したすべての当事者の連帯保証抜きには理解できないのである。まさにこの概念こそが中世には欠如していたのであって、したがって、こうした先例を見出すことが重要である。

この点を詳らかにするには、16世紀に行われていた支払方法をしらべなければならないことは、当然である。実際、裏書は、自らの債権を貨幣化する、換言すれば、それは、商人たちが正貨を紙券に置き換えようとして発明した新たな支払手段であった。

この動機から、若干の論者等は、裏書の起源を相殺のための操作、すなわち、なかんずくリヨン大市で行われていた「出会い (*scontration*)」という操作の中にあると信じている。⁽⁵⁾ 裏書が手形を譲渡することを目的としており、相殺によって債権を消滅させることを目的としていないことから、この仮説は直ちに退けられよう。その上、相殺決済 (クリアリング) はすでに満期のきた手形の最終決済を目的としているのに対して、裏書はいまだ支払期日が来ていない手形の流通を促すことを目的としている。⁽⁶⁾ この相違は大きく、明白であるので、裏書と相殺というふたつの制度は、何らの関係もないのである。

他の論者は、第三者が為替手形の支払を保証する手形保証 (*aval*) の慣行に、裏書の起源を求めている。ここで言われている保証は、銀行が顧客宛に振出された手形を保証し、その手形の満期の際の支払を保証するところの、今日よく知られている保証の引受とは全く異なる。

- (p.85) 17世紀の文献では、「保証 (*aval*)」という言葉は、手形振出人がジャンやピエールやニコラス勘定と移り、(最後に)ポールから対価を受領したことを認める手形に関して使われていた。⁽⁷⁾ この形式によると、ポールと呼ばれた者は、順次、外地で外貨建てで支払われる同一の金額 (外国為替) を購入し、また転売した為替業者らの最後の者を指す。一連の売り手あるいは買い手の代わりに、手形は一連の振出人すなわち手形の売り手たちにより署名されることも時には起った。しかし、それは通常、恐らく投機的目的で締結される一

連の為替取引に関するものであった。

為替手形の不払いや拒絶証書を伴って為替手形が戻ってくる場合、一連の資金提供者の誰もが振出人や取引の直接の相手方を訴えた。償還請求の連鎖はポールからジャンへ、ジャンからピエールへ、ピエールからニコラスへと辿っていくことになる。すなわち、裏書の主たる法的帰結である自動的で連帯的な保証は、いまだ完全に欠いていた。16、17世紀の慣行であった「保証」は、別な面でも裏書と異なっていた。「保証」は一連の譲渡を伴うのは事実であるが、その譲渡は為替手形を振出す前に行われるのであって、振出しの後ではなかった。⁽⁸⁾

為替取引は、実際には、為替の条件や価格を提示するブローカーの仲介によって行われており、為替の契約と為替手形自体の振出しの間には、通常、少なくとも1、2日、時間のずれがあった。その間に、同じ当事者が関わる新しい為替契約を続いて取り結ぶことが出来た。確かに、この一連の為替契約時の保証については、幾冊かの法律書のなかで言及されているが、我々がアントワープやフィレンツェの古文書を調べる機会をもった折、点検した数多くの手形の中にはひとつの事例も見つけることは出来なかった。したがって、この慣行は非常に稀であり、保証に裏書誕生の決定的な役割を与えるのは誤りであると結論せざるを得ない。

他の論者、特にフランチェスコ・フェラーラによると、裏書は、商人たちが銀行の記帳によって債務を支払う慣行、すなわち、両替商や銀行の帳簿上で当事者間で行う預金振替に、その起源があるという。⁽⁹⁾ この見解を支持している論者等は、この支払方法がもし債権者によって受け入れられると、最終的な支払決済になるという点を見ていない。⁽¹⁰⁾ イタリアに於けると同様に、ブルージュで採用された規則によれば、例え、債権者が彼の口座に振り替えられた金額に手をつける前に、銀行が支払を停止したとしても、債務者は免責されたのであった。⁽¹¹⁾ その結果、銀行内振替は債権者に債務者に対する遡求の権利を一切、与えていなかった。そして、明らかに、この支払を遡求する権利こそが裏書の主要な法的効果のひとつであった。⁽¹²⁾ これらの条件においては、銀行内振替という支払方法からは裏書という支払方法が如何に導かれたのかを理解することは出来ないであろう。しかしながら、裏書も一種の

振替であることは認めなければならない。したがって、両者に同じ *girata* という用語を使っていたイタリア人は間違っていたわけではない。語源は考察しなければならない方向を示唆している。

銀行内振替 (*ditta di banco*) とは別に、また、銀行外振替 (*ditta fuori di banco*) というものがある。度々、商人等は「債権譲渡 (*assignation*)」によって、すなわち、債務者は、第三者の債務者に対する債権を自己の債権者に譲渡することで債務を支払っていた。取り立てるべき債権が、自己の債務の支払に役立つのである。⁽¹³⁾ イタリでは自治都市や同業組合の規約によれば、債務者は、債権を第三者に振り替えたいという債権者からの要請を拒否する権利を与えられていなかった。⁽¹⁴⁾ 明らかにこの慣行が非常に普及していたことは、中世商人の帳簿に見られる多数の振替記入からもよく説明されよう。そして、この点、とりわけ遊休している時には非常に費用のかかる現金を節約するためであったことも理解される。

銀行内振替と異なり、銀行外振替は必ずしも債務者を免責しなかったものであり—この点が我々には非常に重要なのだが—、債務者は、債権者に振り替えられた第三者の債務者に対する債権の支払を保証しなければならなかったのである。⁽¹⁵⁾ したがって、不払いの際、債権者は債務者への遡求の権利を与えられることが分かるであろう。

振替により支払う慣行は現金の使用をできる限り排除する利点をもつのであるが、他方、この制度は、すべての人が正貨での支払を回避しようと努めるので、簡単に乱用され、深刻な不都合をもたらすことともなった。往々にして、現金を支払ってくれる債務者が見つかるまで、債権者は、次々と債務者のたらい回しに会った。⁽¹⁶⁾ いまひとつの不便は、振替えられる度に債権譲渡された金額が債務者となった人の帳簿の貸方に移されているかどうかを、債権者が自ら確認しなければならなかった。

これらの不便を考慮して、商人等が帳簿に記帳するよりも、債権の証書自体に振替の事実を記載することで、証書が容易に流通するように事態を改善しようとしたことは至極、当然のことであった。しかしながら、このイノベーションは、中世には債権の譲渡と訴訟の代理の制限に抵触した。事態の改善が必要とされたにもかかわらず、法律家や裁判所の反対を説得するのには簡

単に往かなかった。

裏書が直接、何から生成してきたのかを考察する前に、中世において、手形の流通性の発展を妨げていた法律上の規定について議論しておくことは意味があるだろう。その後、ネーザーラント、イタリア、スペイン、イングランドでの裏書の始まりについて論じよう。フランスとドイツの状況については、資料不足から多くを語れない。

- (1) Jacques Savary, “Parère LXXXII”, *Le parfait négociant*, t.2, Paris 1724, p.602-603; Friedrich August Biener, “Historische Erörterungen über den Ursprung und den Begriff des Wechsels”, *Abhandlungen*, t.1, p.85; Heinrich Brunner, “Les titres au porteur français du moyen âge”, *Nouvelle revue historique de droit français et étranger*, 10 (1886), p.174; Georg Schaps, *Zur Geschichte des Wechselindossaments*, Stuttgart 1892, p.85; Paul Huvelin, *Essai historique sur le droit des marchés et des foires*, Paris 1897, p.559; Henri Lévy-Bruhl, “L’endossement des lettres de change aux XVI^e et XVIII^e siècles”, *Annales de droit commercial français, étranger et international*, 1950, n° 4, p.4; *Id.*, *Histoire de la lettre de change en France aux XVII^e et XVIII^e siècles*, Paris 1933, p.103; Francesco Ferrara Jr., *La girata della cambiale*, Rome 1935, p.20; A.P. Usher, *The Early History of Deposit Banking*, p.103; R de Roover, “Le contrat de change,” 前掲, p.112. 唯一の例外はルイ・ドゥブランである。彼は裏書がすでに1560年に見られたと主張しているが、わずかの資料すら引用せず、全く証拠を提示していない。Louis Debran, *La clause à ordre*, Paris: thèse de Droit, 1892, p.47. 彼の見解は、ホールズワースに引き継がれている。Sir William Holdsworth, *A History of English Law*, t.VIII, p.141-142.
- (2) テキストはまず、アッシャーによって公表され、その後、デ・ローヴァーが修正して、再度、公表された。Usher, *History of Deposit Banking*, p.104; de Roover, “Le contrat de change,” 前掲, p.112. この手形は、ブルゴスの羊毛商人ガルシェル・デル・ペソによって、ブルゴスからアントワープ宛に振出されたスペインの手形である。
- (3) 例えば、ナポリでは、1690年1月4日までのすべての勅令を追認した1706年4月10日の国本勅諭によって、禁止された。*Pragmaticae, edicta, decreta, interdicta regiaeque sanctiones Regni Neapolitani*, éd., par Domenico Alfeco Vario, Naples 1772, t.IV, p. 337. 18世紀中、ノヴィ(Novi)の大市では、複数の裏書はいまだ、禁止されていた。Pierre Giraudeau, *La banque rendue facile aux principales nations de l’Europe*, Genève 1756, p.241.
- (4) Levy-Bruhl, (“l’endossement”, 前掲, p.4) は、同じ意味のことを述べている。
- (5) この見解を提示した最初の人、フォン・マルテンスである。Georg Friedrich von Martens, *Versuch einer historischen Entwicklung des wahren Ursprungs des*

Wechselrechts, Göttingen 1797, p.69.

- (6) Huvelin, *Essai historique*, 前掲, p.559 et suiv.; *Schaps, Geschichte des Wechselindossaments*, p.44 et suiv.
- (7) 保証のこの形態については以下の法学者らが言及している。Gerard de Malynes, *Lex Mercatoria*, éd., 1622, p.395, éds., 1636 et 1656, p.263; de Turri, *De cambiis*, disp. II, quaest. 20, § 9: *Peri, Il negoziante*, 1^{re} partie, chap.26; Phoonsen, *Les loix et les coutumes du change*, chap.32, rubrique 10.
- また、アントワープ慣習法には保証 (aval) についての言及がみられる。Recueil de anciennes coutumes de la Belgique, *Coutumes de la ville d'Anvers*, éd. par G. de Longé, t. IV (Bruxelles, Commission Royale d'Histoire, 1874), p.42: *Compilatae*, 4^e partie, titre III (Van Wisselbrievén), § 72-75.
- (8) Malynes, *Lex Mercatoria*, p.395.
- (9) Ferrara, *La Girata della cambiale*, p.22.
- (10) A. Lattes, *Il diritto commerciale*, p.127-128, p.135 n.26.
- (11) R. de Roover, *Money, Banking and Credit in Mediaeval Bruges*, p.334-335 et 342, n.23, 26. ブルーージュでは銀行口座振替による支払が債権者の同意と出席なしに行われた場合には、債務者は免責されないと裁判所は決定した。この判断は商慣行と一致する。
- (12) Schaps, *Wechselindossament*, p.72.
- (13) この慣行は、1332年来、フィレンツェのギルド Arte di Calimala の規約54項に記述されている。Emiliani-Giudici, *Storia del municipi italiani*, appendice au t.II, p.67; Usher, *Early Banking*, p.83 (テキストが英訳され、掲載されている一訳者)。
- (14) A. Lattes, *Diritto commerciale*, p.135, n.2.
- (15) この点に関して、アレサンドロ・ラッテスは銀行内振替と銀行外振替とを峻別していない (*ibid.*, p.127)。
- (16) こうした乱用は、16世紀のアントワープ取引所やその後のアムステルダム取引所で頻繁に見られた。Elia Lattes, *La liberta della banche a Venezia dal secolo XIII al XVII*, Milan 1869, p.122; J.P. van Dillen, "The Bank of Amsterdam", *History of the Principal Public Banks*, éd. van Dillen, La Haye 1934, p.80. R. de Roover, *Bruges*, p.351.

第2節 中世に於ける債権譲渡

しばしば、中世の債務証書や借用証書は、「何某あるいは持参人に支払われたい」(*payable a un tel ou au porteur*, または *a celui qui ces letters apportera*) といった文言や、同様の文言をもっていた。また他の場合、ラテン語の資料では、記載された債権者あるいは「彼が指名し、証書を持参した者に (*à son nuntio, à son certo misso*)」支払われたと述べている。勿論、

このふたつの文言はまったく同じであるというわけではないが、中世にはその相違は人々が考えるほど大きいものではない。⁽¹⁷⁾ 当時の支配的な考え方では、持参人が債権者の資格を代表するかどうかといったことは、なんら問題にもならなかった。したがって、1271年4月14日、イーブルで作成された自署のある証書は、債権者または「証書を持参し提示する指図された者」に支払われうるとははっきりと述べている。⁽¹⁸⁾ G. ビッグウッドの考察によれば、「誰もここでは単なる持参人が被指図人であることに異議を唱えない。すなわち、より正確には証書の持参人である者以外に指図人はいないのである。」⁽¹⁹⁾ (訳注) 法律の上ではないが、實際上、持参人払と指図払というふたつの形式は、ほとんど区別されないまでに接近していた。何よりも商人間では持参人、すなわちメッセンジャーは、債権者の正当な代理人として通用したのであった。持参人は、同じ会社や組合の人間、従者、ファクター、あるいは家族の一員の場合もあった。

「何某あるいは持参人に支払われたし」という他の文言は、非常に度々使われているのであるが、17世紀初期以前には指図払いの証書は、皆無と言わないまでも、見るのは稀である。この時期以前では指図手形について論じる必要はなく、債務証書だけを論ずればよかった。これはテクニカル・タームで、この用語だけが正しい。⁽²⁰⁾ 「債務の承認」(*reconnaissance*)という用語は、非常に混同されやすい。というのは、テクニカルな意味ではその用語は、質屋や金貸し、あるいは公営質屋が渡した受取書を意味したからである。⁽²¹⁾ 債務証書すなわち自署の証書という場合、一般に公証人や市町村助役あるいは陪審員の立会いのもとで作成された公正証書 (*actes*) で、単なる証書 (*simples cedulae*) よりも正式なものであると理解しなければならない。イングランドの *bond* は私署証書として発行されるとはいえ、しばしば当局に登録 (*enrolled*) されていたので、これもまた公正証書あるいは半公正証書のカテゴリーに入る。

中世の債務証書のなかに非常にしばしば目にするのだが、「何某あるいは持参人に支払われたし」という文言の「持参人」が何を意味するのかが大いに論じられてきた。確実にいえることは、今日この文言に与えられる意味を、当時はもっていなかったということである。債務の承認証書の中に記されて

いるにもかかわらず、債権者がその債権を第三者に譲渡したいときには、委任状あるいは譲渡証書がしばしば作成されていた。何故だろうか。明らかに、その答えは、ひとつは中世の法律が代理という行為を支持していなかったことと、いまひとつは、大部分の場合、第三者には委任状なしには持参人の資格で訴訟を提起することを認めていなかったことである。⁽²²⁾ もし訴訟が生じるような場合に備え、規則にしたがい、二重に準備し、持参人の権利を保障するため、一層慎重に対処することが望ましかった。

ローマ法でもフランスやゲルマン等の法 (le droit barbare) でも、いまだ支払期日が来ていない債務証書の第三者への譲渡は認められていなかった。したがって、債権取立てについて第三者の権利は、成文法の国や慣習法の国を問わず、西ヨーロッパのすべての国では裁判で問題となった。⁽²³⁾

ローマ法によれば、債権は原理的には譲渡できなかった。しかし、この規則を回避するために、債務者と協力して誤魔化すなり、あるいは自己の利益のための代理人 (*procurator in rem suam*) を指名した。しかし、この便法はそれはそれでまた別の支障をきたしたのであるが。実際、代理人は単に委任された者に過ぎず、債務者は、債権者以外の取立てに抗弁を申し立てることすら出来た。そのうえ、その代理を取り消すことすらできたのであった。代理行為が行われてない限りは、債権者は、代理人に知らせることなく、債務者と直接、相談する権利を保持していた。⁽²⁴⁾ 要するに、この種の代理人の地位は不安定な立場に置かれており、近代法が為替手形や指図手形の持参人に付与している特に特権的な地位と何ら似かよってはいなかった。

(p.89) ゲルマン法についてみても、この点、ローマ法より好都合というわけでは決してなく、同様に、債務者は債権者以外の者に支払う義務はないという原理に立っていた。その上、ゲルマン法は裁判で代理を認めてはいなかった。王あるいはその代理者の特許状なしには、代理人による訴訟はいかなる者にも認められてはいなかった。しかしながら、14世紀に最も著名な法律家の一人であった J. ブティリエ (Jean Boutillier) は、商人に配慮して、この原則の厳格な適用を緩和した。彼は、本人以外の者によって代理させる権利を商人に与えたのである。すなわち、本人が不在である場合や、「委任状を別に持参していない」場合の (*sans autre procuration ne letter avoir*) 商行為のた

めに、代理人による訴訟を受理されるようにしたのであった。⁽²⁵⁾

このような法律上の制約にもかかわらず、「何某あるいは持参人払い」という選択的な文言は実用的意義をもっていた。手形や債務証書でのこのような文言の書き込みによって、債務者の持参人への善意の支払は有効と認められていた。なぜなら、もっとも厳格な法学者さえ、弁済のために追加された者 (pour voir en lui *adjectus solutionis*) に賛成していたのである。とは言え、異議が申し立てられた場合には、法律は、正式な手続きを経て作成された委任状や譲渡証書がなければ、持参人が裁判に出廷することを認めてはいなかった。

法学者が、「法の意向により」(ex proprio jure)、すなわち、自分自身の固有の権利として訴訟手続きを行い、自己の利益のための代理人 (*procurator in rem suam*) と、持参人を同一視するようになるまでには、長い時間を要したのである。

この発展は中世末以前には完成することはなかったのであるが、J. プティリエは、持参人が代理人としてではなく、法律上当然に「当事者本人として」(*seigneur de la chose*)、裁判で行動することをすでに認めていた。訴訟手続きは、一旦開始されると、悪意の持参人に対し債権者が介入することでない限り、債権者によって中断されたり、継続されたりすることは出来なかった。「死者は決して手紙を受け取らない」という格言にもかかわらず、プティリエによれば、持参人の委任は債権者本人の死亡によっても消え去らなかった。⁽²⁶⁾

それだけでも、持参人に大いに好意的なこの原理は、フランドルの有名な法律諮問官で刑法学者であり、カール5世の枢密顧問であるデ・ダンフーデレ (Joost de Damhoudere, 1507-1581) によって、一層、拡大された。持参人払いの手形について、彼は以下のような原則に言及している。(1)持参人は委任状を必要としない。(2)当事者本人として (*le seigneur de la chose*) 自分の名前で訴訟を行いうる。(3)持参人の善意は債務者によるのではなく、ただ債権者自身かあるいは検察官によってしか問題にされえない。(4)持参人の権利は債権者の死後も有効である。(5)持参人によって起こされた訴訟は、彼自身によって続けられねばならない。⁽²⁷⁾ しかしながら、この原理は各地ですぐに受容されたというわけでは決してなく、デ・ダンフーデレの生地であるネー

(p.90) デルラントですら時間を要した。

イタリアではローマ法の影響下、債権の譲渡への法学者の反対は他の国より厳しかったようである。いまだ、B. スツラッカ (Benvenuto Stracca) は、持参人を「弁済のために追加された者」(*adjectus solutionis*) の地位に置いていた。しかし、もし現金化のために債権の証書が持参人に託され、あるいは送付されてきたことが証明されるならば、持参人は債権者の名前で裁判に関わることが出来た。⁽²⁸⁾そして、ついに S. スカッチャが持参人に「自己の利益のための代理人」(*procurator in rem suam*) を認めるに至ったのは、やっと17世紀になってからであった。⁽²⁹⁾

フランス、ドイツ、イギリスといった諸国では、債権譲渡の発展に反対する法的制約は、ネーデルラントやイタリアより少しは緩やかであったといったことは決してなかった。⁽³⁰⁾ところで、われわれの見解では、こうした事態は、ただ法学者の間のことでだけではなかった。すなわち、考慮されるべきは人びとのメンタリティにも問題があった。中世では、取引関係は、後に見られるような非人格的性格をいまだもっていなかった。したがって、契約当事者達ですら持っていない権利を第三者がもつことになる商業手形の流通性のような概念が発展する好ましい環境にはなかった。最大の抵抗は法学者からではなく、商人や銀行家の間に見られたことを忘れてはならない。

持参人払条項は大部分、債務証書で使われており、14、15世紀の為替手形にはほとんど見ることは出来なかったのである。⁽³¹⁾ 為替手形は、ほとんど指名された者または商会に支払われていた。非常に稀なことであるが、例外もあったが、それはいわゆる為替手形と呼ばれても、実際は、旅行者、学生、巡礼者のために発行された信用状においてであった—ダチニ文書の中に幾つか見られた—。⁽³²⁾ そのうち、アヴィニオンのダチニ商会宛に振出されたものは、「スペインの枢機卿もしくは彼があなたに指図する者」(*al Cardinale di Spagna o a chi gli vi mandera*) に支払われるというものであった。⁽³³⁾ 為替手形と信用状は双子の証書であるが、しかし、後者は、一般的に商人でない者に代金受領の上で銀行によって発行される点で、前者とは異なっていた。⁽³⁴⁾ 支払われる金額は常に決まっているわけではなく、時には、信用状は受

(p.91) 取人が自由にしうる金額の最高限度を決めているようなこともあった。した

がって、信用状は譲渡される商業手形の範疇に入らない。

これまで見てきたように、12, 13世紀の公正証書による為替契約は、資金の前貸しを受けた借り手が貸し手自身または貸し手の正当な代理人に返済するか、あるいは借り手に委任された者に返済するかを約束する文言が度々、含まれていた。14, 15世紀の為替手形にこの文言がもはや記載されていないという事実からは、すでに見たように、債権の移転を支持しないローマ法からの抑圧的な影響を確認することができる。このような解釈は H. ブルンナーの説で、この問題を研究してきた大部分の人々によって受け入れられてきた。⁽³⁵⁾ しかしながら、われわれはそのような理解が正しいとは全く考えていない。

まず第1に、上に引用した文言を指図文句と誤って説明し、その文言の重要性が過大視されてきたことである。この点については、すでに論じているので、再度、言及することもなかろう。

第2に、問題の文言は、旅商の必要に非常に好都合であったことから採用されてきたのであって、シャンパーニュ大都市の衰退と、コルレス関係に基づく新しい商業組織や、各地に支店や代理店を置いて取引を行う商会の発展以降、その存在理由を失ってしまった。法律の領域でも、このような発展に影響され、会社あるいは商会といったものはパートナーとは分離された別な存在であるということが徐々に認識されるようになった。したがって、為替手形を関係者の誰かが現金化する場合、会社あるいは商会に支払われれば、十分であるということになった。この点については、全く何らの疑義もありえなかった。不渡りの際に作成される拒絶証書は、度々、為替手形の中で受取人と指名された商会の単なるファクターや使用人の訴訟行為において作成されていた。誰一人、彼等が訴訟を起こすことで異議をとええることはなかったのである。この点に関する証拠は、フィレンツェの国立古文書館にあるメジチ文書 (Mediceo avanti il Principato) に所蔵されている多数の拒絶証書のなかに見られる。その中からひとつだけを引用すると、1449年3月にトマーゾ・ポルティナーリは、ピエール・デ・メジチ・ジョルジュ・デ・ピリ商会 (メジチ銀行がブルージュにもつ支店の商号) の名前で、為替手形の拒絶証書を作成した。⁽³⁶⁾ この時点では、ポルティナーリはいまだ単なるファク

ターすなわち使用人に過ぎなかった。彼がパートナーで管理者のポスト、すなわち支店の支配人になったのは、やっと1465年になってからであった。したがって、中世法の厳格さを過大に評価してはならない。たとえ債権の譲渡(p.92)が中世の法律によって阻まれていたとしても、商人が裁判で代理人によって代理することまでも反対はしていなかったのである。

しかし、中世において何故に為替手形がほとんど常に指名された者や商會に支払われるのか、さらに何故に為替手形が第三者への譲渡を許す文言をほとんど含んでいなかったかを説き明かす第3の理由がある。そして、その理由が恐らく最も重要であろう。われわれの見解によれば、そうした文言の存在は、中世において結ばれていた為替契約の本質と矛盾するものであったからである。

中世の為替手形は、繰り返すまでもなく、為替契約を遂行する手段以外の何ものでもなかった。常に考慮しなければならないことはこの点であった。すなわち、為替契約では手形振出人と資金の貸し手の2人が契約の当事者であって、手形の名宛人と手形の受取人は契約遂行の代理人に過ぎなかった。したがって、不渡りの場合、手形の受取人は引受人を訴えたのであるが、振出人に対して直接に遡求することは出来なかった。中世法によれば、この遡求は、振出人と為替契約を結んだ資金の貸し手に属していたのであった。⁽³⁷⁾さらに、法学者等は、為替手形が取り消し可能な指図を含んでいた事実を十分に考慮していない。すなわち、手形の流通性というものは、手形金額受取人すなわち手形持参人に振出人を含め、手形に署名したすべての者に対する遡求権を与えており、さらに、手形に記された支払指図が取り消し不能であるという原則に根拠を置いているのである。このふたつの本質的要件が欠けていたので、中世においては商業手形の流通性は発展することが出来なかったのであった。

これらの法律的考慮に加え、実際、通常は、手形の名宛人は振出人とコレス関係にあり、手形受取人は資金の貸し手とコレス関係にあったことである。商取引の世界では、ふたつの取引先を必然的に結び付けている信頼関係が重要な役割を果たしていた。この点を説明するには、商業通信文のコレクションをざっと見れば、すぐに了解できる。裏書慣行は、第三者を介入さ

せることになるので、イタリア商人が極めて重視してきたコルレス関係に混乱をもたらすことになった。したがって、流通性という慣行が一般に受け入れられるには非常に多くの困難を伴ったことは当然のことであった。すなわち、この慣行は当時の社会観念に激しく衝突するものであった。

手形振出人に対し遡求することができるのは資金の貸し手であって、手形受取人ではなかったことを証明するために、われわれは1385年にバルデが与えた有名な意見書を引用することができよう。しかし、それより以前にも別なテキストが存在しており、それによれば、法律顧問の見解がすでに商人法(*jus mercatorum*)の規則の一部になっていたことが確認できる。⁽³⁸⁾ 問題のテキストは、1380年にブルージュにあるルカの居留地の領事が表明した判断で、資金の貸し手であるジョバンニ・テストと、不渡りでロンドンから送り返されてきた為替手形の振出人であるマテオ・マッタフェローニの間の紛争(p.93)に関わるものであった。後者は、ジョバンニ・テストから受領した金額を戻し為替と拒絶証書作成費用を加えて、返済することを命じられた。手形金額受取人であったロンドンに居住するルカ人のフランチェスコ・ヴィンチグェラは訴訟に参加していない。手形振出人を訴えるのは、資金の貸し手であった。⁽³⁹⁾

16世紀末になっても、アントワープの慣習法はこの点について明白であった。手形受取人は、為替手形の額面金額を提供したのが実際は自分であるということが証明できない限り、償還請求権は受取人にではなく、資金の貸し手に属していたのであった。⁽⁴⁰⁾ 言い換えれば、アントワープの慣習法は、手形期日に手形の名宛人が不渡りにした手形の金額を、受取人が手形振出人に請求する権利を与える場合は、資金の貸し手が手形受取人の代理人にすぎないという場合であった。アントワープの慣習法のこうした規定は、為替契約の性格に符合していたので、明らかに、ヨーロッパのあらゆる所で見られた慣行と適合していた。⁽⁴¹⁾

それにもかかわらず、アレサンドロ・ラッテス(Alessandro Lattes)は、イタリアでは都市の法令にしたがって手形受取人が振出人に対して遡求する権利を持っていたと主張している。⁽⁴²⁾ しかしそれは、よく調べてみると、法令に使われている用語が不正確であったことから来る誤解である。法令は債務

者と債権者について語っているが、それらの用語は、手形の振り出しが問題の時には、手形振出人と資金の貸し手を指し、それに対して、支払が問題になる場合は、引受人と手形受取人を指していた。⁽⁴³⁾ フェアラ市の法令は、不渡手形が返送されてきた場合には、手形を振出した者が資金を与えた者に対して責任があると正確に述べており、一切の疑惑を払拭している。⁽⁴⁴⁾

為替契約の取り消し可能性について、アントワープの慣習法には曖昧なところはなく、資金の貸し手 (*gever van den gelde*) は、名宛人によって引受けられた後でも為替手形の支払に反対する権利を留保していた。⁽⁴⁵⁾ いずれにせよ、受取人が支払期日以前に破産した場合には、その事実それ自体によって、^(p.94) 為替手形に記載されている指図は、無効になると見なされていた。⁽⁴⁶⁾ その結果、満期に至っていない為替手形金額を支払うとなると、名宛人は一切の危険を引受けることになる。⁽⁴⁷⁾

これらのテキストは非常に明瞭で、疑問の余地もないと思われる。すなわち、為替手形に関して、法律の規則は現代のものとは非常に異なっていた。他のすべての歴史的問題と同様、この点についても時代錯誤に陥ってはならない。

われわれの主張は、1483年にフランドルの参事会 (*le Conseil de Flandre*) に提示された訴訟の詳細によって大部分、実証される。この訴訟で為替手形の支払が、手形の上に手形金額受領者と指名されていない者によって要求されている。被告は訴答において、手形に記載されていない持参人の訴訟は委任状あるいは譲渡証書がなければ、決して受理されないはずだと申し立てた。訴訟記録にはこの規則がブルージュの「取引所」の慣行に明白に一致していると付け加えられている。⁽⁴⁸⁾ ブルージュの取引所で行われていた慣行は、恐らく、他の都市でもまた通用したであろう。要するに、中世ヨーロッパでは為替手形は持参人に支払われることもなく、裏書という方法で譲渡されることもなかったのである。われわれの見解では、こうした点は、ただ法律規範が厳しかったということに関連することではなく、まさに為替契約の性格それ自体に関わることであった。

(47) *Georges Bigwood, Le régime juridique et économique du commerce de l'argent dans*

- la Belgique du moyen âge (Memoires in-8° de l'Academie Royale de Belgique, Classe des Lettres, 2^e série, t.XVI)*, 1^{re} partie (Bruxelles 1921), p.507 et suiv.
- (18) Georges Des Marez, *La letter de foire a Ypres au XIII^e siecles, contribution a l'etude des papiers de credit (Mémoires in-8° de l'Académie Royale de Belgique, Classe des Lettres, t.LX)*, Bruxelles 1900, p.35, 37 et 131 (piece just. n° 37). Cf. P. Huvelin, "Compte rendu du livre de De Marez," *Revue Historique*, t.77, (1901), p.152-172.
- (19) Bigwood, *op. cit.*, p.10.
- (訳注) 鷹巣教授のご教示によると、日本の民法・商法には指図に関する規定は設けられていない。したがって、指図という概念については、主にドイツの民法学説や商法学説を参考になっているが、被指図人や指図受取人という言葉は、支払権限を与えられた者を指すのか、支払受領権限を与えられた者を指すのか、論者によって異なっているようである。本稿では「被指図人」という言葉は、支払受領権限を与えられた者を指す概念として用いている。
- (20) その上、この用語はこの時代のもので、シャルル5世の布告の中で使われていた。イングランドでは、債務証書 (*bills of debt*) と呼ばれた。
- (21) フランドルでは、woekerbriefje あるいは lombaardbriefje, ドイツでは Pfandschein, イングランドでは pawnticket, イタリアでは polizza と呼ばれた。
- (22) Usher, *Early Deposit Banking*, p.72.
- (23) ローマ法については, Giuseppe Salvioli, *I titoli al portatore nella storia del diritto italiano*, Bologna 1883, p.7: その他の法については, Heinrich Brunner, *Les titres au porteur francais du moyen âge*, *op. cit.*, p.16 et suiv.
- (24) Salvioli, *op. cit.*, p.9-10.
- (25) J. Lamfere, "Un chapitre de l'histoire du prêt a intérêt dans l'ancien droit belgique," *Bulletin de l'Académie Royale de Belgique, Classe des Lettres*, 1920. p.94.
- (26) Usher, *Early Deposit Banking*, p.97; Brunner, *Les titres au porteur francais*, 前掲, p.41; Jean Boutillier, *Le grand coutumier général de pratique, autrement appelé Somme Rural*, Paris 1537, livre I, titre 11 et 107.
- (27) Joost de Damhoudere, *Practycke in Civile Saecken*, La Haye 1626, chapitre 97, p.216-217.
- (28) Salvioli, *I titoli al portatore*, p.167-168.
- (29) *Ibid.*, p.172.
- (30) Freundt, *Wechselrecht der Postglossatoren*, t. II, p.76.
- (31) A. Lattes, *Diritto commercial*, p.181, ただ、1550年のポローニャの法令の中にのみ、持参人払いの為替手形についての言及が見られる。*Ibid.*, p.182, 192, n.18.
- (32) Bensa, Francesco di Marco, p.322 (n° 15), 323 (16-17), 325 (19-20), 327 (23), 330 (28), 332 (31), 343 (48). 信用状の歴史をあつかった論文もあるが、もっぱら法律上の観点から記述されたものである。Rufus James Trimble, "The Law Merchant and the Letter of Credit," *Harvard Law Review*, 61, 1948, p.981-1008.

- (33) Bensa, Fran. Di Marco, p.323 (n° 16). 他の事例は p.325 (20) 参照。
- (34) われわれは、その事例として、ベンサによって公刊された n°s 22, 23 を引用することができる。
- (35) ブルンナーによれば、16世紀のしばらくの間、ローマ法の影響から持参人払い手形がもつ実際の意義のすべてが取り除かれる結果になったとのことである。Le titres au porteur, 前掲, p.37.
- (36) Giulia Camerani Marri, I documenti commerciali del fondo diplomatico medico nell' Archivio di Stato di Firenze (1230-1402), Florence 1951, p.72, n° 196.
- (37) この点は、以下に非常にはっきりと述べられている (Carl Freundt, Das Wechselrecht der Postglossatoren, t.I, p.85)。スカッチャやデ・ツッリ (ibid., p.88-89) によれば、17世紀においてもこの原則は受け入れられていた。
- (38) Balde de Ubaldis de Pérouse, Consilia, t.I, n° 348. Cf. Freundt, Wechselrecht, t.I, p. 85.
- (39) R. de Roover, “La communauté des marchands lucquois à Bruges de 1377 à 1404,” Handelingen van het genootschap 《Société d'Emulation》 te Brugge, 86, 1949, p.56-58.
- (40) この点を証明するものは為替手形には記載されていないので、手形を送付する際に添えられる通知状のような別の書類を調べ、問題が起れば提示することが必要になった。 Coutumes d'Anvers, Compilatae, titre III, § 4, n° 49 (4^e partie, p.34-35).
- (41) この問題については、すでに、バルデが彼の有名な意見書のなかで論じている (Consilia, t.I, n° 348)。同様に、スカッチャやデ・ツッリによっても述べられている。Cf. Freundt, Wechselrecht, t.I, p.85-89.
- (42) A. Lattes, Diritto commerciale, p.184.
- (43) Constitutiones domini Mediolanensis, Milan 1552, f° 106^{ri}; Statutorum civilium serenissima Reipublicae Ianuensis, libri sex, Gênes 1690, liber II, cap.4, p.77; Breve della Santità di N.S. Papa Pio V con li capitoli del cambio reale di Bologna, Bologne 1570. フィレンツェ国立図書館には、最後の冊子は以下の法令とともに綴じられている。 Statuti della honoranda università de' Mercatanti della inclita Città di Bologna riformata l'anno 1550.
- (44) Statuta Urbis Ferrariæ super reformata, Anno Domini 1567, liber VIII, 5, f° 250^v.
- (45) Coutumes d'Anvers, Impressæ, 55, § 7 (2^e partie, p.410-411); Compilatae, titre III, § 4 n° 42 (4^e partie, p.32-33).
- (46) ibid., n° 43-44.
- (47) Coutumes d'Anvers, Antiquis, titre 28 (1^{re} partie, p.598-599); Impressæ, titre 55, § 6 (2^e partie, p.410-411); Compilatae, titre 3, § 3, n° 29 (4^e partie, p.26-27).
- (48) J. Maréchal, “Het international karakter van de Brugsche handelsbeurs,” Bijdragen voor de Geschiedenis der Nederlanden, 1, 1946, p.89.

第3節 ネーデルラント、特にアントワープでの裏書の先行事例

研究の現段階では裏書の先行事例の資料は、恐らく、ネーデルラントが最も豊富で、また問題の複雑さや法律のかつ経済的な側面からみても、最善のものが見られるであろう。

16世紀にはブルージュの法律はいまだ中世的伝統の影響下にあり、債権の譲渡を促すものではなかった。⁽⁴⁹⁾ 例えば、アールスト (Alost), ブリュッセル, ルーヴァン, メヘレン (Malines) 等、大部分の都市では、たとえ債務証書に証書を提示する者に支払われうると明白に契約されていても、慣習法は委任状と譲渡証書なしには持参人には裁判を起こす権利を認めてはいなかった。⁽⁵⁰⁾ その結果、持参人は、精々、弁済のために追加された者 (*adjectus solutionis*) に過ぎず、債権を現金化する権利はあっても、意義申し立てを行うため、訴訟に訴えることはできなかった。

(p.95) とは言え、大商業中心都市の慣習法は、大部分の小都市のものより遥かに法の適用は緩やかであった。ブルージュやアントワープでは、持参人が委任状を必要とせず、法律を有効に利用することができたのである。⁽⁵¹⁾ このリベラリズムは1537年の布告の影響と考えられるが、しかし、この布告に先立ち公布された1527年のブルージュの法令を考慮する必要がある。しかも、このブルージュ慣習法は改革を意図して公布されたのではなく、ただこれまで長く行われてきた規則を追認しているだけであった。⁽⁵²⁾

アントワープの慣習法は1537年より以降に起草されているが、しかし、その場合も、旧来からの慣行を取り入れたものであった。実際、すでに1507年にアントワープ総督 (Magistrat) は、訴訟で見解の表明を求められ、アントワープの慣行と習慣にならって、持参人による訴訟は受理されると言明した。⁽⁵³⁾

これら市の助役一彼等は裁判官であり、行政官でもあった—は、外国商人が他の都市に移り住むことを懸念し、できるだけ彼等の要望に応えようとしていたことはよく知られていた。外国人嫌いは、ロンドンではよく見かけることであったが、ネーデルランドではほとんど見られなかった。反対に、あらゆる手段を使って、外国人との取引を取り込もうとしていた。⁽⁵⁴⁾

こうした状況のもとでは、アントワープ慣習法に寛大な性質が見られたこ

とは、何ら驚くことではなかった。早や1569年の編修された慣習法(*In Antiquis*)において、債務証書に「何某あるいは持参人に支払われる」とする文言が含まれている場合には、支払を拒否した債務者に対して、証券の保有者は、もはや債務証書の振出を厳しく要求することもなく、自分の名前で訴訟手続きを行う権利を与えられた。⁽⁵⁵⁾ 持参人は、訴訟を起こすために委任状も譲渡証書も示す必要もなかった。すなわち、債務証書をもって判事の下に出てくればよかったのである。しかも、債務証書に金額受取人が偽名で記されている場合にすら、そのこと自体は債権を取立てる持参人の権利になんら影響しなかった。そして、終に、原債権者に申し立てうる相殺その他の抗弁は、持参人に対し適用されなかった。慣習法(*Impressae*)—*In Antiquis*につづいて起草された慣習法—によれば、少なくとも、持参人の善意を疑う深刻な理由がなければ、持参人は債務証書の保有が正当であることの証明義務を免除された。⁽⁵⁶⁾ さらに、慣習法(*Compilatae*)—16世紀末に起草された—は、訴訟を行う持参人が、原債権者の代理人でも委任された者でもなく、人格的に原

(p.96) 債権者であるとして、本人の名前で関与することが出来ると規定した。⁽⁵⁷⁾ 証書の譲渡は債務に付随した保証をもまた譲渡するのである。⁽⁵⁸⁾ これらの規定が債権の譲渡を保証するものであることを認識しなければならない。すなわち、これらの規定はさらに事態を進め、商業手形の流通性への道を切り開くものであった。

この規定は、ネーデルラント全体に一般的に適用された1537年3月7日の布告によって、確固たるものとなった。⁽⁵⁹⁾ しかしながら、規定が現地の慣習に一致しないところに於いても実施されたかは疑わしい。⁽⁶⁰⁾ とにかく、1537年の布告は、外国商人居留民団、特にイングランド人の使う詭弁や乱用に止めを刺すことを目的としていた。⁽⁶¹⁾ 悪意の債務者は、訴訟を長引かせ、債権者に支払わなければならない債務の支払を回避しようとして、あらゆる逃げ口上を使っていた。こうした事態に終止符をうつため、上記の布告は、持参人に裁判に出廷する権利を認め、悪意の支払人が債務支払を逃れようとするために使うあらゆる引き伸ばし手段を禁止したのであった。自分の名前を記載されている債務証書に偽りが無いことを認めざるを得ない債務者は、前もって担保を入れることなしには、抗弁を認められなくなった。自分自身が署名し

たものでないと述べ、不正にもそれは偽造されたものだと言主張する者には、重い罰金が科せられた。布告によって、裁判官も裁判をできるだけ速やかに行うように命ぜられ、猶予を与えることを厳しく禁じられたのであった。

重要なことであるが、1537年3月7日の布告は、もっぱら債務証書や約束手形に適用されたのであるが、当時、債務証書が譲渡証書を作成することもなしに、単なる引渡しだけで、商人間を転々と流通していたことを認めている。しかし、そこでは為替手形については何ら言及していない。為替手形は、その後、1537年5月25日に出された布告の中で、別枠で取り扱われた。⁽⁶²⁾ 為替手形の迅速な支払を保証するため、布告は同様に遅滞のない訴訟手続きを行えるように措置をしたが、しかし、持参人の権利については何も述べていない。それでは、債務証書がしばしば持参人に支払われ、しかも単なる引き渡しによって転々流通していたのに対して、為替手形は通常、指名された人のために振出され、譲渡されることはなかったと、結論しなければならないのであろうか。

実際、事態はそうであったと思われる。とは言え、特にイングランド商人やハンザ商人ら、若干の人々の間では、すでに債務証書や約束手形(promesses)に認められていたことを為替手形にも広げ適用することを求めている。このような動きは激しい反発を招いたと予想される。1560年頃にはルカの商人たちが抗議の声を上げていた。彼等は、アントワープ総督に提出(p.97)した請願書の中で、この新機軸が有害であると告発している。⁽⁶³⁾ いまだ17世紀にはイングランドの重商主義者ジェラルド・デ・マリーンズは、海の向こう側で債務証書で行われているように、持参人払いの為替手形の振り出しを行わないように同国人に勧告している。⁽⁶⁴⁾ 我々の見解では、この反対は、すでに述べたように、譲渡性は為替手形が取り消し可能であるという原理と相容れないものであったという事実から説明される。

アントワープ取引所やベルゲン・オブ・ゾーム大市での支払慣行に関する詳細な研究は全く見当たらない。そのため、我々は、いまある不確かで断片的な情報に依拠せざるを得ない。我々が利用できる不完全な資料に拠れば、イングランドやハンザ商人たちは、持参人払いの債務証書を特に利用していた。為替手形の中にこの条項を挿入し一般化しようとしたのも、恐らくまた

彼等であろう。しかし、この傾向は、イタリアや高地ドイツのマーチャント・バンカーの反発を招いたであろう。彼等は、この新機軸がコルレス関係の精巧なメカニズムを台無しにする弊害を伴うと考えたのであった。

これら商人グループ間での持参人をめぐる態度の違いは、われわれの見解では、彼等の取引方法の大きな相違から同様に説明できる。イタリアや高地ドイツに本店をもつ大商社が、支店やコルレス先と協働して取引を行っているのに対して、イングランドやハンザ商人の取引方法は、一段遅れた段階にあった。彼等は商品の売り買いをするため、定期的にアントワープやベルゲン・オブ・ゾームの大市を訪れており、一旦、大市が終われば、急いで自国へ戻ってきていた。時には、彼等は債権の現金化や次回の大市取引の地ならしのために、その地に代理人を置くこともあった。しかし、このやり方は必ずしも一般的なものではなかった。イングランドの資料によると、とりわけマーチャント・アドヴェンチャラーらは絶えず旅に出ており、イングランドとネーデルラント間をしきりに行き来していた。イングランドやハンザ等、北の商人は商品を運んで来るが、ほとんど正貨を持参しなかった。そこで、持参人払いの債務証書の形で債権を流通させ、債権を貨幣化させることは、彼等には好都合であった。これはつまり、物々交換の最高の制度ということになる。イングランドの重商主義者らは著書の中で、債権債務決済のこの効果的な方法を賞賛し、イングランドでこの方法がいまだ認められていないことを嘆いていた。⁽⁶⁵⁾

北の商取引では何事もおおらかで、為替手形と債務証書の区別も曖昧であったので、為替手形を債務証書と同じように使っていこうという誘惑が大きかった。しばしば、為替手形は為替形式を取る代わりに、約束手形として作成された。すなわち、商人は一定の金額の受け取り、他地での同額の返済(p.98)を約束した。⁽⁶⁶⁾ それらの不規則な形式にもかかわらず、我々は、この種の証書を為替手形、すくなくとも類似の手形と見なすことに違和感はない。なぜならば、それは場所の相違と時には貨幣の相違を常に伴う為替契約に基づいているからである。その上、低地ドイツではそれらは為替債務証書(*Wesselcedul* or *Wesselbrief*)と呼ばれていた。

公正証書に基づく為替契約証書(*instrumentum ex causa cambii*)を思い

出させるこの形式の証書の起源は、中世にまで遡る。すでにこの時代には、ハンザ商人たちも外国で入手しうる貨幣に関わる取引 (*overkopen*) をおこようになっていた。⁽⁶⁷⁾ とも言え、その取引は、為替手形をめぐってイタリア商人が行う取引の規則性と強度を持つに至ってはいなかった。リユーベックあるいはフランクフルト・アン・マインを銀行所在地と呼ぶほどには、取引は頻繁に行われてはいなかった。⁽⁶⁸⁾ そこは銀行所在地ではなかったし、そこには銀行業者はいなかった。しかし、16世紀末まで、ハンザ商人らは為替手形に支払約束形式を与え続けていたのである。⁽⁶⁹⁾ こうした事例は、当時、アントワープの公証人によって作られた拒絶証書のなかにいくらかでも見られる。⁽⁷⁰⁾ これらの手形には、頻繁に持参人払いを認める選択的文言が含まれていた。同様の事態は、イングランド商人によって振出された為替手形にも見られた。この点は、M. M. ポスタン教授によって公表された1472年の手形や、W. ホールズワース卿によって公表された1562年の手形からも明らかである。⁽⁷¹⁾

持参人払手形は、指図手形ではなく、同じ保証を与えるものでもない。次々と後続する持参人は未知のままなので、彼等の最後の人は、手形不渡りの場合には、先行する人になんら遡求の権利を行使できない。恐らく、この点から、多数の商人らは、債権譲渡や銀行外での振替によって債権が支払われることを選好していたのであろう。アントワープで上記の方法が広がったのは、そこには預金振替銀行が存在していなかったからと思われる。15世紀以来、ブルゴーニュの政府当局は、この種の機関には極めて敵対的で、預金を受け入れ、預金振替により支払を行うことを、両替商であろうと誰であろうと、厳しく禁止していた。⁽⁷²⁾ バンク・マネーがないのであれば、別な便法に頼らざるを得なかった。なぜなら、アントワープやベルゲン・オブ・ゾームの大都市に集まってくる商人らは商品を運んできても、正貨はほとんど持参してくることはなかったからである。

1541年10月31日の布告によれば、為替手形は現金で支払われるのが原則であった。⁽⁷³⁾ しかし、受取人が債権譲渡に同意するのであれば、支払人はその取引の善意の保証人として残ることになった。アントワープの慣習法も同じ趣旨のことを述べている。すなわち、債権の受取においては、何人も第三者あての債権譲渡を受け入れてはならない。しかし、そのような支払方法がとら

れる場合には、債務者は債権者が支払いを実際に受け取るまで、その債務から解き放たれることはなかった。債権譲渡による支払は、最終的なものではない。換言すれば、現金が入手されない限り、債務者は債務から自由ではなく、債権者は債務者に遡求する権利を事実上、保持していた。⁽⁷⁴⁾ 商業手形の流通性に辿り着くためには、この原理を裏書に拡大すれば十分である。裏書は、実際は一種の債権譲渡 (d'assignation or de cession) だったのである。

アントワープの状況は、裏書発生に好都合ではあったが、16世紀末まで裏書の事例は見つからなかった。最初の裏書された手形が発見されたのは、1610年の日付をもったものであるが、それらはすべてスペインで振出されたものであった。⁽⁷⁵⁾ 1611年の日付の手形は、ルカの銀行家ジョバンニ・カランドリーニ&フィリポ・ブルマツキによってロンドン宛に振出されたイタリアの手形で、受取人であるイングランド人ウィリアム・セルビーによって裏書譲渡されている。⁽⁷⁶⁾ 初期の裏書の事例では、領収書を与える際の文言が使われている。恐らく、初期の裏書は、いまだ実際の譲渡というよりは、むしろ現金化の単なる委託だったのであろう。

1610年や1611年には多分、裏書はいまだ一般的な慣行にはなっていなかったと思われる。これらの日付をもった手形の束の中には、裏書された手形は非常に僅かしかみられなかった。アントワープ市立古文書館に所蔵されている大量の17世紀、18世紀の為替手形の中には、次々と裏書された手形が見られることから、1640年以降に、裏書は一般的なものになったのであろう。⁽⁷⁷⁾ かくて、1610年と1640年の間に裏書慣行が一般化していったと確実に言うことができるであろう。

以上、要約すると、アントワープでは商業手形の自由な流通を妨げる慣習法や法規はなんらなかった。事実、債務証書は単なる譲渡や同じく裏書という方法で、商人の間を転々と流通していた。「債権譲渡による」支払は債務者を決して解放しなかったので、債務証書の持参人は、彼の前に証書に署名したすべての人たちに対して遡求する権利を自動的に持つという結果になった。

(p.100) 単なる約束手形に倣って、為替手形を譲渡可能に、すなわち、裏書可能にする一定の環境の下でなされた努力は、16世紀末までには成功することはなかった。資料不足のため、ともかく、裏書慣行が以降30年間のうちに一般化

したという事実の確認でよしとせざるを得ない。

- (49) *Lameere, Un chap. de l'hist. du prêt a intérêt*, op. cit., p.77-104.
- (50) この問題についての最善の資料は王立歴史委員会によって発行された数巻にのぼる『ベルギー旧慣習法集成』である。*Coutume de Bruxelles*, § 59, p.477; *Coutume de Louvain*, cap.I, § 39., p.20; etc. *Costumen van de twee steden ende lande van Aelst*, Gand 1618, rub.12, § 10, p.83-84. F・ヘヒトの著書もまた参照できよう。*Félix Hecht, Ein Beitrag zur Geschichte der Inhaberpapiere in den Niederlanden*, Heidelberg, 1869. 本書はメヘレン市の慣習法(1535年)を引用している。とは言え、ヘヒトの書物の参照は慎重を要する。
- (51) ドルトレヒトやユトレヒトの慣習法も持参人に有利であった(*ibid.*, p.14, 17)。ヘヒトはドゥールネ=ボルヘンフート(*Deurne-Borgenhout*)の慣習法を大いにおもんじているが、これらの町はアントワープの郭外であった。
- (52) *Louis Gilliodts-van Severen, Coutume de la ville de Bruges*, t.II (Bruxelles 1875), p.318, n° 127: status du 27 août 1527, art.5.
- (53) Oskar de Smedt, “De keizerlijke verordeningen van 1537 en 1539 op de obligaties en wisselbrieven: eenige kantteekeningen,” *Nederlandsche Historiebladen*, 3, 1940, p. 32. アントワープの総督は、1537年の慣習法以前の別の機会、すなわち、1529年か1532年に同じ趣旨の発言を行っている(*ibid.*, p.33)。
- (54) このように言っても、軋轢や紛争がほとんど起こらなかったというわけではない。我々は外国商人の居住地についての政治的な一般的傾向を述べているに過ぎない。
- (55) *Coutumes d'Anvers, Antiquis*, titre 27 (1^e partie, p.596); *Impressae*, (2^e partie, p. 398).
- (56) *Ibid.*, *Impressae*, titre 53, § 7 (2^e partie, p.398).
- (57) *Ibid.*, *Compilatae*, titre 2, § 8 (4^e partie, p.12).
- (58) 上記引用文中, § 10.
- (59) *Recueil des ordonnances des Pays-Bas sous le règne de Charles-Quint (1506-1555)*, éd. par Ch. Laurent J. Lameere et H. Simont (*Recueil des anciennes ordonnances de la Belgique*, 2^e série), t.IV, (Bruxelles 1907), p.15-17.
- (60) なぜならば、若干の慣習法は公布の発布以降も持参人に訴訟の当事者になる権利を否定していた。
- (61) *De Smedt, De keizerlijke Verordeningen*, op. cit., p.16 et suiv.
- (62) *Recueil des ordonnances de Charles-Quint*, t.IV, p.34-35.
- (63) *Goris, Etude sur les colonies marchandes méridionales à Anvers*, p.111 et 339.
- (64) *De Roover*, p.121.
- (65) 特に、以下を参照。*Malynes, Lex Mercatoria*, p.97 (éd. 1622), p.72 (éd. 1636, 1656, 1686).

- (66) 例えば、以下で紹介されている、通知状を伴った1411年の事例 (*Wilhelm Stieda, Hildebrand Veckinchusen, Briefwechsel eines deutschen Kaufmanns im 15. Jahrhundert*, Leipzig 1921, p.68, n° 53 et 54)。他の事例は以下を参照。Max Neumann, *Geschichte des Wechsels im Hansagebiet bis zum 17. Jahrhundert* (supplément au t. VII de *Zeitschrift für das gesamte Handelsrecht*), Erlangen, 1865, p.119 et 122. Cf. 巻末資料, n° 1.
- (67) Karl Wilhelm Pauli, “Ueber die frühere Bedeutung Lubecks als Wechselplatz des Nordens”, *Lübeckische Zustände im Mittelalter*, t.II, (Lübeck 1872), p.98-171.
- (68) ドイツの歴史家、とくにヴィルヘルム・コップは、そうは考えてはいない。しかし、われわれはこの点、彼ほど確信をもてない。なぜならば、われわれは、イタリアのマーチャント・バンカーの元帳とヴィッコ・ファン・ゲルデルセン (Vicko van Geldersen) やその他のハンザ商人の帳簿を比較対照する機会を持っていないからである。とは言え、ハンザ商人はまだまだイタリア商人銀行に比べられるものではない。イタリア人はドイツ人よりはるかに進んでいる。フランクフルト・アン・マインは15世紀になって銀行所在地の地位に就いたが、しかし、いずれにしても、それは始まったばかりであったにすぎない。
- (69) Neumann, *Geschichte des Wechsels im Hansagebiet*, p.96-97.
- (70) Jakob Strieder, *Aus Antwerpener Notariatsarchiven, Quellen zur deutschen Wirtschaftsgeschichte des 16. Jahrhunderts*, Berlin-Leipzig 1930. p.106 (n° 132), p.112 (n° 141), p.165 (n° 237), etc.
- (71) “Private financial instruments in Medieval England,” 前掲, p.65; *History of English Law*, t.VIII, p.152, n.8.
- (72) De Roover, *Money, Banking, and Credit in Bruges*, p.339-340.
- (73) *Recueil des ordonnances de Charles-Quint*, t.IV, p.330.
- (74) *Coutumes d’Anvers, Compilatae*, titre 15, § 11 (4^e partie, p.378).
- (75) De Roover, “Le contrat de change,” 前掲, p.112-113.
- (76) 巻末資料, n°s 10 et 11.
- (77) これらの為替手形は、アントワープ市立古文書館の破産書類室 (Insolvent Boedelskamer) と呼ばれる部屋にあるボール箱の中に山積みされている。

(記) 本稿の訳出に当たって、本学名誉教授鷹巢信孝氏 (民・商法) よりご教示を得た。記して謝意を表します。